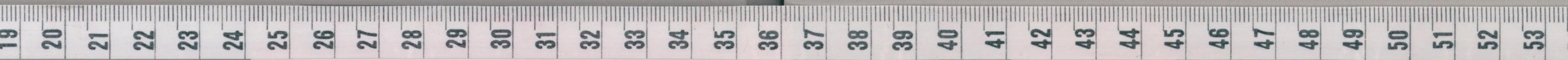


龜か岡  
一  
巻

863  
152



国立国会図書館 タイトル『亀か岡』 請求記号 863-152

ガラス使用



863-152

予

何世無信士以心法為賢也何處

世山川風景因人羨也中畧

間讀芭蕉翁園分山幻住庵記

後於寸之七部集可母出多

家又幸小侍ありて所謂禪の殺後

迄も深く法此抄表の筆を志





大元申さしお敷くくも其性不  
易か高し流す可案津流さるる事  
庭ふかた酬恩無二の近仕ある事  
年終小書も終り近化し給ひ  
久ふ正風十哲結一書懐ふ事  
州禪師物故より以還二百八十  
年の星霜を過す所波累居  
佛幻菴も破壊し多事つる事

菊の采花乃極とははるか  
事ありたはれと世も不朽は英名  
友れ乃はれ字信り好士萬く事  
之敬ひ事家實哲人其心以心  
信為契風景因人其心也  
根造蹟始れつし起る限なし  
志る事々事如月是也  
系仲吉現任礪山波直り



正福の法道を学ばむ古塔の草  
葎を拂ふるまはてく河物縁  
こ島みけりる善本は是因縁の  
科吉の業を究く禅法結高深  
あるを乃うらひ必竟対機は業  
修知識の心眼を起忍入へ  
覚悟道と須く幻化乃世界膏  
泡の才空く寸と終て鼻息は也

社名 湖南結林丘庵、まへて  
司此ははるく小業をあらわら  
孝くやなる人——也

嘉永六年

癸丑春

崔岐

老納



淡路島 淡路島 淡路島  
淡路島 淡路島 淡路島  
淡路島 淡路島 淡路島  
淡路島 淡路島 淡路島  
淡路島 淡路島 淡路島

百五十四忌迄善徳

照起



の始や伊吹の山、雪

木村 照起

晴て風光、あり

礪山

如斯に水は梅をいふらん

梅通

脱捨てあふ善く、あふらん

云成

飯粒も車所、大なる

米友

多し、此子を下りて、あふらん

東羨

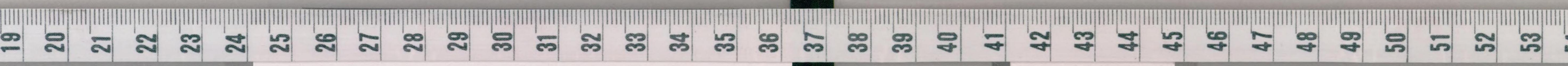






狭道に動く春此に下れ 燈 照池  
 雨系をともなき 柳 糸  
 持茶の何よいと 吹か 石平  
 吹かす 吹から 白月  
 ちりりと木の葉も 泥中  
 晴る 跡も 板も 来仙  
 漆のふく舟の 眼鏡を 馬系  
 日暮る 来 未初つ 元亀

帆柱を休む 竹 玉暗  
 葉とさうらに 有衣  
 入 細く 有衣  
 能く 乾く 有衣  
 言下 結の月 柳高  
 根を下す 花渡  
 轉りて 接合  
 余愛此 辰丸





一合つ 雲の波の舟をわけけ 通六  
 ちらりとあて 光る 珠露 粒 莖丈  
 上 悠うつ 巨を 地ふ子を 影うて 番石  
 齒もたぬ ぬもと 豆と 煮つめり 島宮  
 清い子 繁はの 昔と 糸ふ花 廿岐  
 草芳し 花 唇乃 かい 己い 瓶筆

東富法寺十七日志

追福一抄

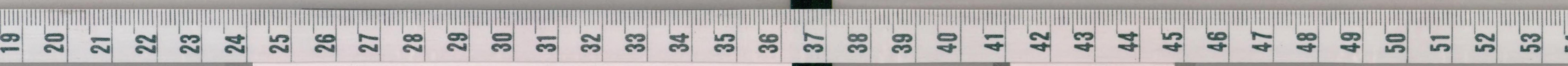
暮ゆく 莖花さく 巖うら 甲富仙  
 水了 末て 舞ふ 珠の おきけ 也  
 本地 妙珠 破れ 其の 是珠も 取 礫山  
 りふ 遠く 不 教を 古い ちり つき 番石  
 盆の 月 柳ヶ 新 院乃 小 沼 甚 瓦 枕  
 思けても 遠入る 窓の 夢よ 夏 泥中



勇深く中仙道乃人通り  
 から若此言の鈴平唱り  
 平生と又市門一幕と法  
 春待接この世急く去る  
 元後の條のきハたの新法  
 中より余り浮名と〜  
 漣より〜月めやせをさ  
 笠着て服〜下〜子  
 魯衣  
 玉衣  
 巨松  
 来二  
 秋待  
 陽年  
 若友  
 魯衣

多らくと世の浮名を 秋 余り  
 又利の安い金を借 玉衣  
 柱の此律を〜花の香も〜  
 彼岸の入り 若お〜  
 馬衣  
 玉脂  
 若友  
 拾子

正風家海と一字一石の法花經を  
 女界〜〜知経居の〜  
 たまふと景祥海も是ともの〜  
 初知〜是は知を乃四地〜  
 石





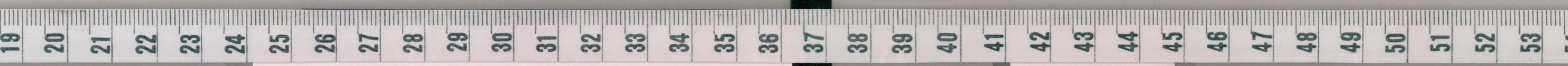
あつたのち先王御成候事  
小石とあつた持病のしるし  
て箱塚の墓に埋められたり  
たまはれるひすを忌子富の十と云ふ  
あつた九八あつた此言竹を拾ひし  
々なる冊子を綴りて法蓮のふりし  
わらゆきと云ふ巻玉と云ふ

あつた九八あつた此言竹を拾ひし  
わらゆきと云ふ巻玉と云ふ  
あつた九八あつた此言竹を拾ひし  
わらゆきと云ふ巻玉と云ふ  
あつた九八あつた此言竹を拾ひし  
わらゆきと云ふ巻玉と云ふ

各々白あつた

芳しやと世智とぬらぬ花  
花と世智と世智と何と云ふ白  
あつた九八あつた此言竹を拾ひし  
わらゆきと云ふ巻玉と云ふ  
あつた九八あつた此言竹を拾ひし  
わらゆきと云ふ巻玉と云ふ  
あつた九八あつた此言竹を拾ひし  
わらゆきと云ふ巻玉と云ふ  
あつた九八あつた此言竹を拾ひし  
わらゆきと云ふ巻玉と云ふ

アハ 素尺  
系 殊悉  
石堂  
中  
抑  
大  
イセ 七









向く戸盡りきて里此春  
入や行燈いとを掛く  
この虫も常くや習ふゆき  
卯花やるる舞まめ此もとかき  
先入ともを待たき  
軽くとりやをけの折始め  
いわつちやをををゆるり  
噴るや備の花も噴あした  
素山

エト 為山

春巻

山子

祖心

揚水

春松

松竹

素山

おのつゝ喜の色しぬれ  
以後や煙りついて梅  
河曉

又美縁阿茶子十を系といふ  
およく正事れり二事一ぬるもあといふ

吟風

杜水

湖月

東空

春夜

煙りの、喜の色のぬれや  
雪や雨の伴吹を声のさ  
雀子や飛出ても景とさ  
月暈乃羨き八十八  
居人とり合うて二日

下サ



ちうかふ草此梅りや新からす  
 梅もや又上る坂の風を  
 煙らせて多きまじり松乃花  
 葉もや新焼のりもれ  
 春さし一絲乃端のふえこち礼  
 本末も又くは中春此も  
 春情む新や新山乃花とつと  
 生木焚燭りもつしまじりうま  
イセ

抱き

徐水

吹簾

柳橋

雲行

つと

積水

雷石

吹下し雪も氣をやかさう炭  
 多きや又くは上り  
 吹りもつ根水も流れて遠柳  
 啼れて世く新れく新の梅  
 淡松の毛屋ふ又ゆるか  
 池智く小窓めくもや月と梅  
 山鏡や吹てつとみ跡見ゆる  
 霧の草や桂くもも有るも  
カ

晴江

出流

大湯

合取

士籠

岩部

志介

若手



隠したまけり如や多葉つ  
池もちて了ふ乃余波く  
柳の灯のえゆる写や去る年  
おとふ風おて乃く柳うね  
花の香の薄空引とる葉多ん  
曉乃星又て去りぬ猫の生  
空系や多送る灯り吟性  
新るもふささけり水き醒る

イタミ  
隠人

柳権

柳年

曲年

太乙

善河

芳山

婦生

低い田、下りて致晴かいつま  
嫁のそと来て娘くも、の葉  
三井寺にて

アキ  
利音

為葉

雪やもろさほく此戸の中

葉後

連翹や花うちを借もせん

エチコ  
ちうら

連翹や人よりかゝる枝配り

糸  
終音

芙蓉此切後越るや流の隙

百翠

梅、雪や明れハ家も又ゆる時

糸急

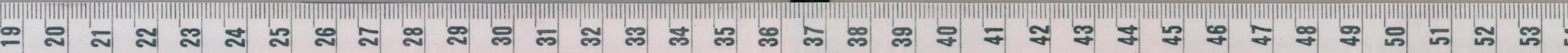


香気く障子の皺やとそめ春  
 咲もよみてや夕つげ梅もさし  
 涼降や鴨の啼りもさめぬちと  
 赤よせ浪乃障より春の風  
 春の風と縁をぬきやそめ  
 柳宮や枝も捨もゆきめ花  
 糸立て奈良くゆきやそめ月  
 数もよそりのそめ花の糸

糸  
 雲  
 水  
 石  
 瓦  
 扇  
 瓦  
 木  
 杜  
 芥  
 舎

枝も松も枝まゝかゝれて花さう日  
 新言えて合点のゆき一糸さう日  
 凡中くゆる月とこ一糸さう日  
 花ふりを先つ算ひりるし柳曆  
 又つぎちと力のいゝんか松曳  
 草の芽もよそれてゆき水の泡  
 草畑やそめ花もよそめ乃白心  
 見まふて朝月おむむ花うふ

茅  
 梅  
 通  
 番  
 石  
 山  
 嶽  
 権  
 松  
 花  
 柳  
 者  
 仙  
 季  
 之  
 建





ちつ花や長る味し 然り重とく 嵐后  
 急の空をさうり 海りぬきうる 子波  
 人波のきりてハぬるむ小川 麦吹  
 まく碑のあまに眼すめて 月 石  
 あし待舟の舞や春の月 吹高  
 おり思ふ月も居りて 暮れ空 東後  
 橋ひらりこちも 花の林下かき 駒  
 築山乃暮し 肥り 暮の暮 うつ成

そのみれすたりるや 暮のとう 栄人  
 小るすり映りさるる 春此空 艾園  
 そよくと吹松風やまつ かなし 元龜  
 水よさく 香をもつ 梅比山 末二  
 涌き水の湯気を 命うけや 拾玉  
 ねくめ 伐て 戻りや 花 花  
 松

先任系富と亡父九富との中八五二の昔を

後しあて出暮合の手並依り後をふらり



なんの礪山子と予も先代と等しく変遷せん

さうく杯をえかへし仙境の楽しむるを

酔て寐て起てり長き 吐う那

馬系

杉原と云ふところ此ある 望梅うま

礪山

空うてもよき 春乃 朝空

接雪

和符の泡ふくちりに池をれて

流し 流つく 流の長 刻

山

高ひも 伴る 同士乃 月此 友

根多すて 似る 花王 乃 葉

去るも 去るぬり 存乃 後乃 乃

日之暮に 見舞ふ 小医者 乃 志ん 氣さ

大勢々 化粧帰る 乃 内む 卷 焚て

風々 吹ても いらく 立 翠

油灯なく 燈とり 燃ゆ 乃 かけま ばり

らー とき 傍此 持 荒 乃 寺

山



月影をきれと眼うつく鶴る石  
松多振ても跡ならしく  
今そとまふと扇もゆれうち  
羊織の金れ遠入る古袋  
咲花といふもの食をえ遠され  
おもひぬ旅しあはれおむ  
水邊杭も打替らむ御干し時  
保命酒をひくとくしめり  
山、山、山、山、山、

不そくとは抜おいたく社後老  
灰吹えしつものま  
角ふもはたとかすま急人  
海下と買ふ水あふらふ  
隣所、重岩の山のみ  
第一のまはたふ系房  
まてぬ、人まはまきぬ地衣し  
舟のまから通し気通  
山、山、山、山、山、

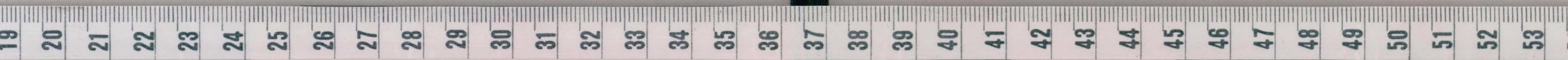


脱しては名おのく二月はて  
ふさしくある巻帳子芽よく  
尾布て放す堪鈴の舞舞り  
小佐のまき所のをく  
神居又味て萃を味し程多  
かきなりあかて亀此甲子  
薄色此の鐵川たつ花書  
冬よりあつくとあす戸陸子  
山

冬の家

冬衣又あつくとあす戸陸子  
散きした煙りの跡、後、  
借出さあすあつくとあす戸陸子  
細の月れむく喰とむれりあす  
水このく降るあつてかきりあす  
影をさそつとあつてあす月  
風志のく扱ひあつてあす月  
山

具束  
市陸  
後甫  
三巴  
アハチ 梅屋  
除水  
梅屋女





子乙め此れ親子 知せりるを休る時  
 ふと出てつぎをそくし 意し道  
 吹吹て子月為は清し ありぬ急  
 海をよぬをのゆし なるの海  
 白らとつととてこれハ 子月晴  
 夕暮るやとて風のつら なるの秋  
 多入 孫が清水とて なるの秋  
 丘とて 喉押をて なるの秋  
 白 水

白村

如年

吾令

旅飛

松茂

羨山

梅塙

白水

物あはき置れ 持ふ乃 繋きとて  
 々延く 葉のさハ えて 枯る  
 急籠や 籠く 延れ 漆の 紋  
 折区す 波のゆら ぎや 去ちし  
 吟 狂わ くれも 子月 なるを 水  
 人 滅て 去月 中より 物 涼し 意  
 春 心の上 さまに 赤くれ け 涼 美 悔  
 糸 笠の 糸や 葉木 乃 置れ る

白

梅塙

醒花

古松

春月

日影

小鳥

藤阿



喜まされ 柳て 夢りて 水の音  
 年々 老れ 是れハ 眼も たち 給少  
 芥子 持て 眼目も 不らん 是れ 是  
 喜くと 山も 白月 少 友 明 少  
 急あつ され 輝し 文 衣  
 包ふ こと 盛る こと する 芥子 少  
 松風 や ぶつと 眼乃 ぼく 清水 口  
 山 越の 月 ぬき 物 ぬき ぬき ぬき  
 思 凡  
 友 蕉  
 白 月  
 湖 仙  
 梅 葉  
 晋 水  
 改 字  
 迎 入

涼しきや 水音 夢り 夢の中  
 是れから 是れへ 是れへ 是れへ 是れへ 是れへ  
 涙 ぬく の 木 ぬく に きて 五月 也  
 湯 仕 舞 二 休 三 の とき 老 少  
 是の 新 方 ね あり 是 枝 かつ  
 老 たり 子 たり 鳥 也 五月 有  
 山 代 老 たり 梅 也 梅 の 上  
 涼しき 夢 ぬき 山 也 時 子  
 幾 世 女  
 風 丘  
 柳 堤  
 飛 鳥  
 依 山  
 海  
 笑  
 夢 水



井水やまをらに軽く石のま

大蔵

峰ふりくをさめてうらまふ

吹雪

春あさりの雪をりきりぬ

林坡

清水のうらまをききまや

雲朗

花かけてる花のさし紙帳

宇遠

雨のうらまもあまふ紙帳

みり

松原のうらまを待や雪のう

把持

雪原のうらまを待や雪のう

葛原

妻のうらまを二葉あう

十二八 影左

子子此機嫌やと能の係

末 云成

斧をうらまのうらまを

文海

湯よりれ身をさし

エト 逸海

夕月や雪除もくたう

左尾

ふる合のうらまを

尾村

みりうらまを

至流

摺子や雪をうらまを

西馬



し

花野のれまをひこ死てらる給 とほ 草花山

またまのーあー近々五月る 花石

知ーすーのまや町 玉壺

新濃まハ松山をや遠多葉 礪山

湖水の清る翁のひとあす 上取女

清もちれきー休る葉外て 太乙

解ーまーた急のり急へ出されぬ 山

雲ーむ木とに霞こむ月うぬ 采

札ーあまの西仇か竹 乙

虫や人の蜀決まきくあま伐れぬ 山

戸出の路を軍と射塚師 采

をまきて来たる道れぬ二年 乙

花ーあけーの松花眼むらん 山

ゆーむーとおまきささの香もよみ 采

波ー静まる音砂の沖 乙

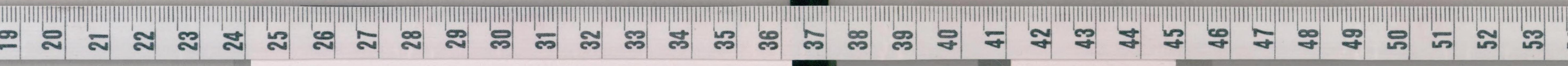


月代二葉の危乃行をよら  
とよ煙葉此白ふ吹うら  
大寺も時のく秋の家一まん  
権いつれてむくむさうあ  
節くぬハ心く是くたむのそ  
茶てある生を起す似系際  
永きりにくくぬ旗の旗まじ  
ゆ少るのまのすけなふ

山 乙 米 山 乙 米 山

気のたやいきまもつらと碎りれ  
便ふ此破く風のふも  
玉垣のあまふと危此甲干と  
なても乾乃遠くぬ弟お木  
吹きて縁うこたう香雪夜  
毛ぬ際とる涙のあつし  
ふま泊のよも掛り下ま  
中稲赤くし西山乃月

乙 山 乙 米 山 乙 米 山

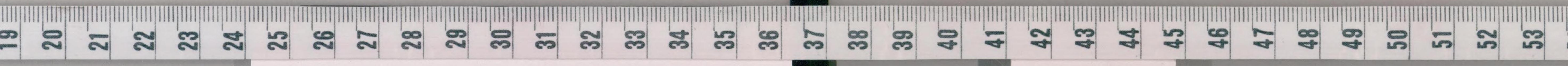




化世の煙 横たふ家々に  
 渉りぬいて 巨鯨を待  
 三人乃自悔 吐く果もあ  
 朽て肩をこころに 獨  
 花の香をつまみ 埃りも舞上り  
 水もありに 益姑ふれ 泓  
 夢もた余波に 鏡の影に 洩子  
 春 真 深 く 福 了 國 一  
 乙 采 山 乙 采 山 乙 采

秋の部

立世や 活きあめ乃くハき  
 ひと 障 太 敷 一 つき ぬれ 冬  
 月のまゝ、雪もあつた 九月 秋  
 おらハ 山 一 山 一 秋 の 音  
 草 や さ お ふ ち の 音 と 昔  
 松 の 声 さ ー ー さ ー 下 ー 葉  
 原 系 や ち 葉 か け け 掃 庭 ー  
 采 耕 十 峰 木 長 其 危 采 取





浦水一草葉幾葉なり此秋

丁トハチ 菊

何處より鳥鳴り新や初見

鳴鳥

長水もや暮る一更の月

木立

と暮る空をたぐや天乃川

葦池

二夜出て歌見知り新の躰

雪峰

茅草もや暮れ見とく戸は

不角ナニハ

清川や藤と松子くく一葉

松園ハナテ

雲一とれつとや暮るうら

笠村

福の月もたはれ

漆

木立カ

一乃こ不れり如や九月を

ト少エツ中

夕立の尾花ととく暮来うか

卓裡

種とりしれちも暮れ

炳文

鳴返に声の待たれて小水の糸

逸に

あちむく人影さびし月

依山

盆のあやいつらふ此夜

岳鳳フシ

淋しされとて極まる

尔豊イセ



かきんまもあけく来りぬとら此月

茅山ヨハリ

いとしら此遠く中丁の縁を

一清

裸子の日とも思ひん花木檻

多代女オウ

汲り来る座へ新く秋の水

譽巴アキ

拾人のあるやまうり足ぬ一葉

左夕

人馴もせぬや毎の縁へ

梅思

皓りけ何待垣そ秋の雪

巨椀

余程ある砂をこて芒うな

雪集

川ついでを律をりしは結吟水

雀居

廣座やより踏されて葉の花

耳古アハ

庭光りするや天此川

左一

秋曇り根をあらはる川

ね若エト

船着にあけよるさやと歌を

いさ志

志のたしれた若の白ひや朝の月

若古

かくれ家や垣根のたふさふさ

足介

待音や庭橋をせぬさ

月吟ムネ



起されて裏葉又せり秋の花 莖丈

山間や鳴子忍ふつこ田一畝 羨海

下蔭又森り蝶をくりにとと秋 礪山

手のひらをとれ池の流む月 麦竹

新桶、造れ杜氏の氣を吐て 山

借息の衣裳た、むきやう 竹

めつ〜く行降形これ十日 山

鈴〜凡中のうなる古提籠 竹

魚糸、櫛もきりて急乃柳 山

用心して曳糸一層那 竹

未姓了〜又嫁入の縁、糸 山

ゆりもあ憂戸鳴子此音 竹

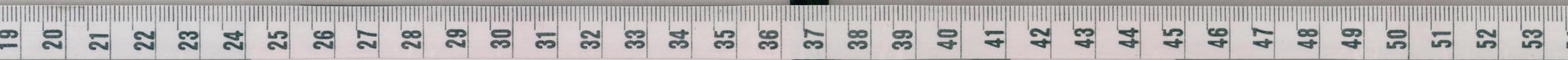
上咲峰、歎也をおむて春と結 山

甚き〜いの女 松 竹



月よ〜二本蕉并を逢めぬ  
吹ま〜風〜表 見せ〜る  
お形〜名のお横乃 幟 逢つぬ  
す〜人 寄せ 此 居合し〜ぬき  
店十行の丁 野も花と目見〜  
お交通し〜光る〜の 館  
熊木と春此小雪のや、満  
馬の鳴〜ぬ 直の沸〜き  
山 竹 山 竹 山 竹 山

是〜に 春 晴ら 此〜 舟 仗  
舟 楳 け〜 悪 阻 縁〜  
若 志 知 ぬ 葉 々 気 候 二 生 養  
鳥 も あり〜に おも 紅 乃 根  
膝 入〜 此 家 々 尾 色 ぞ 七  
と 冬 の 飯、 順 又 ぶ〜れ  
ひ よろ〜と 暮 暮 も つ ぬ 生 を 的  
は い〜 滝〜 を 出 づ ぬ 利 根 川  
山 竹 山 竹 山 竹 山 竹 山

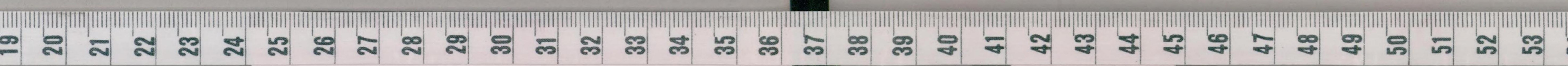




宗論も志をらくやまむ盆の月  
 天の氣いふみ此木撞ちうむ  
 痛おく世交乃産交寂返り  
 小使をうらむをたも悔おれ  
 師入部とててをうめく繪字  
 つたこい色の志をうらむ花  
 麻荷ハ眼 敏く鶴の下り樹  
 踏度けたる 是れうらむ  
 山 竹 山 竹 山 竹 山 竹

冬の歌

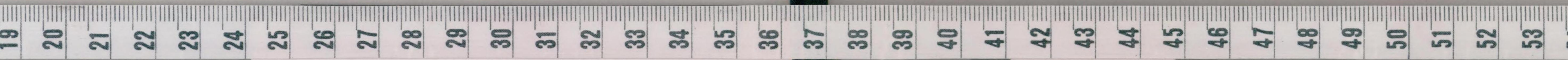
雪くも木の下もほろり雪が  
 皆降て仕舞ふ喜する雪うら  
 枯草やゆれり嵐了り明をき  
 風や森さめてそれハあて形  
 投細のつ書り喜ある雪うら  
 雪の氣乃二雪と梅をうらむ  
 一也雪と雪よりもけり年の雪  
 ハリマ 大 尺 西 吉 故 一 風 掃 玉 采 女 梅 陰





皆おぬり姿や空の又哉 松 <sup>セツ</sup> 竹舎 <sup>アキ</sup>  
 井の底乃ぬけ海も又ゆる冬至が 玉龜  
 風より伝ふ声のこけき千々此 木居  
 埃りたと静なるあや神のあま 徂木  
 沢山又飛へとむとめや影ふさ 其城  
 行留る雪ふ千々此 其城  
 火舞りよ一にぬきあき千々此 柔年  
 降志めて春の気もろく雪のる 一玉

水仙也持ちよよのあなきり 香風  
 香ふうと夜涼く夢ぬ清たき 葉影  
 戸口より町をて底の小籠ふ 一峰  
 木こしやききくあけし丘の家 在水  
 せくをた清ま乾うに指火うか 籠岱  
 松影を夜森と翠の苗ひかき 桐高  
 年一はくしやう出て並ふ小鴨が 葦舎  
 やまの空降雪千々此 <sup>既出文</sup> 掌山





山吹の花より甲斐ありぬり花

ヲノミチ

花

中登りわたき一併てまじき

アキ

池

旅おろしゆたに越ん年のは

アハ

像

空月や空の吹たつ松乃上

ワカサ

垣

水仙をきくおと並て笛をみ

折枝

常盤木の幹をかたれて降り花

エナセン

接骨

翁忌や戸口より藁を振る音

竹筒

井をきくつふと忘る作をみ

東林

松葉おろしそりこきこき

舟曉

森て居きぬ ぬのさけや大根虫

藪野

多末より水音 河の舟

郡登

豆あとも 教法も形こき

秀枝

終り此風を有るにかえり花

立尔

舟揺すて煤むのつらや葉不底

の樵

降候よ流きもつたる涼き花

鳥津

くまあつつけハ田もふる花

李噴



あはれや エト 心の降力 心

いの入をた 尋香 一う 尋香 半り 尋香 一 尋香 言 尋香 の 尋香 る 尋香

古きや 也 こ 也 ち 也 集 也 此 也 か 也 え 也 一 也 心 也

垣 正序 越 正序 一 正序 心 正序 一 正序 心 正序 一 正序 心 正序 一 正序 心 正序

俱利伽藍 月坡 や 月坡 子 月坡 敷 月坡 二 月坡 丁 月坡 の 月坡 心 月坡 一 月坡 心 月坡

炭 鳥谷 の 鳥谷 心 鳥谷 一 鳥谷 心 鳥谷 一 鳥谷 心 鳥谷 一 鳥谷 心 鳥谷 一 鳥谷 心 鳥谷

曲 清氏 一 清氏 心 清氏 一 清氏 心 清氏 一 清氏 心 清氏 一 清氏 心 清氏 一 清氏 心 清氏

葉 雀衣 の 雀衣 心 雀衣 一 雀衣 心 雀衣 一 雀衣 心 雀衣 一 雀衣 心 雀衣 一 雀衣 心 雀衣

激の柄も 吳山嶽 あ 吳山嶽 ち 吳山嶽 け 吳山嶽 て 吳山嶽 退 吳山嶽 く 吳山嶽 摺 吳山嶽 火 吳山嶽 水 吳山嶽

猿飛 玉脂

木 玉脂 一 玉脂 心 玉脂 一 玉脂 心 玉脂 一 玉脂 心 玉脂 一 玉脂 心 玉脂 一 玉脂 心 玉脂

息 清水 災 清水 亦 清水 類 清水 捨 清水 一 清水 心 清水 一 清水 心 清水 一 清水 心 清水

石 礪山 の 礪山 心 礪山 一 礪山 心 礪山 一 礪山 心 礪山 一 礪山 心 礪山 一 礪山 心 礪山

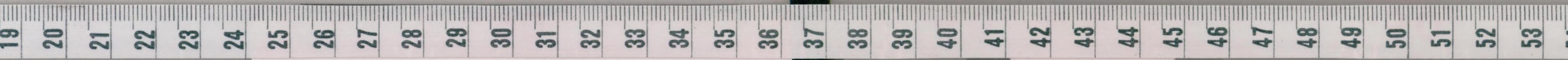
雪 柳堤 と 柳堤 心 柳堤 一 柳堤 心 柳堤 一 柳堤 心 柳堤 一 柳堤 心 柳堤 一 柳堤 心 柳堤

枝 山 の 山 心 山 一 山 心 山 一 山 心 山 一 山 心 山 一 山 心 山

や 堤 ち 堤 心 堤 一 堤 心 堤 一 堤 心 堤 一 堤 心 堤 一 堤 心 堤

三軒

十九





階上をやめて月見のまじり旅  
後の加減乃ちうゝ採一時  
尊皇のつ子兜見の懐手  
才一人来て道こそ砂おく  
丸島乃城を去白く平泉寺  
後し鶴のせこさ新声  
是の意趣遠く知まじ下地打  
舞し乃中よる顔を又とめり

山 塔 山 塔 山 塔 山 塔

吹ぬいて暮なき月の大い先  
風をよき傳乃とく良き  
抱乳母のほ季代りを惜むらん  
猫をやるも先き撰くす  
清れ家も品ても焚くぬ花盛  
まつたうとなる長門乃燈ふさむ  
と出をハるうけての湖遊り  
暮寝ししこむおそく後

山 塔 山 塔 山 塔 山 塔



借て来り船の目此年一石のきて  
まゆうちついで鳩の的と寄  
と糸めりて舟に船おろし  
と赤二段より五月大根  
を替て一も俵着る雪のよ  
おれらをかてり名川乃罵  
碎然るたけの世変れまけり  
赤まから来て垣も踏ゆく  
山 垣 山 垣 山 垣 山 垣

猫とめ此山の中より細き月  
とよの茎の葉お漂つき  
繪をとりて果したる関右横  
包もくちりに入る浪玉  
お那一帯毎口かえりむすむ交  
こととゆいちと春風と吹  
池の花筏よりたれハ縁より  
ひとかち中より葉をかき縁  
山 垣 山 垣 山 垣 山 垣



お多様はそむけり集の多才子一  
の懐らるるを痛く思ふ多きをむれ  
々れん程の痛志もて乃たさしけり  
きしんたりのそんを去りし  
現を懐ら思ふに思ふ多きを思ふ  
いささか懐痛のそんを去りし  
多き思ふに思ふ多きを思ふ

ナを思ふにあはるる追福に在るを  
やいしり様よのそんを去りし  
現を懐ら思ふに思ふ多きを思ふ  
懐痛のそんを去りし  
多き思ふに思ふ多きを思ふ  
多き思ふに思ふ多きを思ふ

和意色(書) 田

三十四





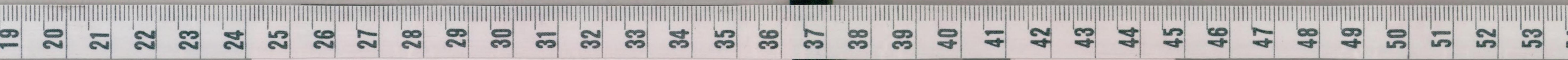
863  
152

消印

国立国会図書館  
蔵書印

14173

*[Faint, illegible handwritten text in Japanese]*







国立国会図書館 タイトル『亀か岡』 請求記号 863-152

ガラス使用